

新たな移民像を描く現代アイルランド人作家の挑戦 —— コルム・トビーン『ブルックリン』を中心に ——

河 原 真 也

はじめに

アイルランドといえば、多くの移民を世界中に輩出してきたことで知られる。特に米国の政財界や芸能界においてアイルランド系米国人の存在が目立つことが、米国とアイルランド系移民との関わりを密接にしてきたことは否定できない。他方でアイルランド人は隣国の英国はもとより、米国以外の世界各国に数多く移民しており、“Irish Diaspora” と呼ばれる一つの概念までできあがっている。棺桶船に乗るという劣悪な移動環境を伴う移民に対する悲劇的なイメージや、英国や米国におけるアイルランド人への差別的な言説によって、全般的にアイルランド系移民に対して負のイメージが付与されてきたが、果たして実情はどのようなのであろうか。

本論では 21 世紀のアイルランドを代表する小説家、コルム・トビーン (Colm Tóibín) の『ブルックリン』(*Brooklyn*, 2004) をもとに、アイルランド人作家が「移民」というアイルランド特有の社会現象とこの国の複雑な歴史をどのようにとらえてきたのか、一考察を加えることが目的である。論を進めるにあたっては、階級格差などアイルランドにおいてこれまで目を背けられてきた社会の矛盾が、移民を描く作家の行為にも反映しているとの仮説のもと、時代によって移民の実態が異なることにも目を向けながら、アイルランドというローカルな場所での創作を行うアイルランド人作家の、この地が抱える「負の歴史」に対する姿勢を解明していきたい。

1 『ブルックリン』とその社会的背景

『ブルックリン』は1950年代初頭のアイルランド東海岸に位置するエニスコシー（Enniscorthy）と米国のニューヨークを舞台にした小説である。主人公のアイリーシュ（Eilis）は雇用に恵まれないアイルランドの地方都市で臨時雇いをする女性で、新たな可能性を求めて米国へと渡る。カトリック神父の世話によってニューヨークのデパートに勤めながら、夜学に通う一方で、イタリア系移民の男性と恋をし、大人の女性として成長していく。都会の生活を満喫するなかで、ある日故郷から姉の急死を知らせる連絡が届く。一時帰国することになったアイリーシュは、恋人との婚前交渉と極秘結婚という、カトリック信仰をもつアイルランド女性にしては大胆な行為をとった後に、故郷に戻る。かつては全く相手にされなかったにもかかわらず、米国帰りの洗練された女性となったアイリーシュへの街の人びとの対応は激変した。そしてニューヨークに残してきた夫の存在が彼女の中で徐々に薄くなる一方で、街の有力者の息子との距離は縮まる。母親も娘がアイルランドにとどまり、裕福な家庭に入ることを望んでいた。しかしながら、米国へ行く前にかつて臨時雇いをしていた食料雑貨店の女主人の呼び出しを受け、アイリーシュのニューヨークでの「過去」を明らかにすることを示唆される。昔と変わらないアイルランド社会の閉鎖性に嫌気がさした彼女は、最終的には故郷を捨て、夫の待つ米国で生きていくことを選択する。

アイルランドを舞台とする『ブルックリン』第1部においては、1950年代のアイルランド社会を反映した記述が目立つ。アイリーシュはレイシー家の次女とみられ、母親が受け取るわずかな年金と30歳になる未婚の姉ローズの稼ぎによって一家は生活している。製粉所の事務部門で働けるほどの専門的知識をもつローズと、自身も会計に関する免許状を所持するアイリーシュの姉妹は、中等教育以上の教育を受けていることが推察される。当時の一般的な基準に従えば、おそらくレイシー家は中流下層階級に属すると判断できよう。一方でアイリーシュと年齢に近いジャックは、他の兄二人とともに英国のバーミンガムで働いている。それなりの資格があっても当時の地方都市では雇用が限られ、また多くの若者が故郷を離れ、異国の地で働かねばならなかった。こういった描

写は1950年代のアイルランド経済をまさに反映したものである。

1922年にアイルランド自由国として英国から独立し、1949年に共和制へ移行したアイルランドの経済は、1950年代になると壊滅的なぐらいに最悪のものとなった。背景としては1932年以降、外国資本の締め出しや保護主義的な外交姿勢が鮮明となっていたことが考えられる (Garvin 112)。対して、アイルランドが英国から独立し自由国となった1922年以前の経済状況は、貧富の格差や住宅事情の悪さなどそれなりの欠点はあるつつも、必ずしも悲惨なものではなかった。当時のアイルランドの経済的水準は、国際比較を行うと日本はもとより、イタリアやポルトガルなどの南欧諸国、ノルウェーやフィンランドなどの北欧諸国と比べて良好であったという (Farmer 14; Ferriter 173)。英国からの独立によって得られた自由の代償が、英国との関係悪化によってもたらされたアイルランド経済の停滞だったわけである。

特にアイリッシュが生まれ育ったエニスコーシーのような地方は過疎化が進み、文芸復興期に牧歌的なアイルランドのイメージ作りに寄与していた「農村」は壊滅的な打撃を被っていた。そして対外貿易の大幅な減少や失業者の増加、移民による人口減などによって、アイルランド社会全体が停滞し、そういった状況が作家の創作にまで影響していく (Brown 200-01)。『ブルックリン』の主人公も、多くのアイルランド人と同じように経済的な理由から国外に雇用を求めて出ていくのだが、作品の舞台となっている1950年代にアイルランド人が移民した背景と、19世紀から20世紀初頭にかけて移民をした人びととの環境は大きく異なる。この点については後述するが、移民を生み出してきた社会的背景と人びとが移民をする動機は、時代によって異なっていた点をここでは強調しておきたい。

さて、19世紀半ばのじゃがいも大飢饉以降、多くのアイルランド人が米国に舞い降りる。その多くはカトリックを信仰する、土地をもたない者であった。ちなみにじゃがいも大飢饉以前には、長老派などのプロテスタント系のアイルランド人が多く北米大陸に渡っている。一般的にイメージされるアイルランド系移民とは、19世紀半ばから20世紀初頭に米国へ渡ったカトリック信仰をもつ、小作人などの土地を持たないアイルランド人であったと言えよう。『ブルッ

クリン』においてもそういったアイルランド系の人びとの姿が描きだされている。クリスマス・パーティーを手伝いにフラッド神父の許へ行ったアイリッシュは、アイルランドからきた年配の労働者たちと出会う。

‘How many are you expecting?’

‘Two hundred last year. They cross the bridges, some of them come down from Queens and in from Long Island.’

‘And are they all Irish?’

‘Yes, they are all leftover Irishmen, they built the tunnels and the bridges and the highways. Some of them I only see once a year. God knows what they live on.’

‘Why don’t they go back home?’

‘Some of them are here fifty years and they’ve lost touch with everyone,’ Father Flood said. ‘One year I got home addresses for some of them, the ones I thought needed help most, and I wrote to Ireland for them. Mostly, I got silence, but for one poor old devil I got a stinker of a letter from his sister-in-law saying that the farm, or the homestead, or whatever it was, wasn’t his, and he wasn’t to think of ever setting foot in it. She’d scatter him at the gate. I remember that. That’s what she said.’

(*Brooklyn* 84)

慈善的な要素をもつこのクリスマス・パーティーに参加している者の多くは、年代から逆算すると19世紀後半から20世紀初めにかけてアイルランドを離れ、米国の公共工事に携わりながらこの国の発展に寄与してきたアイルランド系移民たちであろう。「取り残されたアイルランド人 (“leftover Irishmen”）」とは、祖国に帰れずに米国で一生を終えることになる者たちを指す。ここに描写されている移民の姿は、20世紀になる前に新天地での自由を求めて米国へやってきたカトリック系のアイルランド人と推察できる。引用箇所の後にある記述からは、彼らがアイルランド語（ゲール語）で話すシーンもみられる。19世紀後

半にはアイルランド語母語話者の数は激減していたとはいえ、アイルランド西部をはじめとして、まだ一定数は存在していたのだ¹。

ここでとりあげた移民に関する記述は、いわゆる一般的に流布するアイルランド系移民に対するイメージそのままのものである。『ブルックリン』の読者の中にはこれらの移民を扱うシーンに対し郷愁の念や同情とでもいうべきものを想起する者もいるかもしれない。しかしながら作品全体においてアイリーシュをはじめとする、移民をめぐる描写からは、同情を引くような形での移民表象とはなっていない点に気づかされる。果たして作者のトビーンはどのような意図でもって創作を行ったのであろうか。

2 移民を描くアイルランド文学の伝統

20世紀のアイルランド小説において「移民」が描写されてきた例は数多く存在する。その多くは米国への移民であるが、英国や南米などへ移民する人びとの姿も登場人物として描かれてきた。20世紀初頭の作品に共通するのは、英国支配下のアイルランド社会を舞台とし、植民地支配を受けてきた負の歴史、あるいは被支配者としての抑圧された声が作品中に、直接的にしる、間接的にしる、反映されてきた点である。たとえばジョージ・ムア (George Moore, 1852-1933) の『未耕地』(*The Untilled Field*, 1903)には、移民先の米国から病気療養のため帰郷するが、保守的な慣習が残る農村社会の閉鎖性とカトリック教会の理不尽さに辟易し、再び米国へ戻る男性が描かれている。そして「帰郷」(“Homesickness”)と題されるこの小品では、宗主国英国への反発というよりも、アイルランド社会をがんじがらめにしてきたカトリック教会への嫌悪感とでもいうべきものが強調されている。ジェイムズ・ジョイス (James Joyce, 1882-1941) の短編集『ダブリンナーズ』(*Dubliners*, 1914)に収められた「エヴリン」(“Eveline”)には、親を捨てて故郷を離れようとする女性主人公が登場する。彼女は抑圧された家庭と先のみえない将来から逃れるため恋人とともに南米に移民しようとするも、家庭の呪縛から逃れられず直前でそれを断念してしまう。『ブルックリン』のアイリーシュも母親の面倒をみるという使命を兄たちから示唆され一時帰国するが、こういった家庭の犠牲となる女性像はアイルランド文

学がもつ典型的要素といえるかもしれない。ムアの作品にしろ、ジョイスの作品にしろ、20世紀初頭のアイルランド小説に現れる移民像は、英国とカトリック教会という二つの存在から逃れられず、それらに支配されていた当時の社会の閉鎖性と結びついていた点は否定できない。

アイルランド経済の停滞期が過ぎ、自由貿易への参加やマスメディアの発展等によって社会が大きく変容することになった1960年代になると新たな移民の姿が描かれるようになる。エドナ・オブライエン (Edna O'Brien, 1930-) の『カントリー・ガール』(*The Country Girls*, 1960) は、アイルランド西部出身の田舎娘が首都のダブリンへ移住し、そこで一人の女性として成長していく姿が描写されている。奔放な女性主人公の行為に出版当時の読者は多いに驚愕したという。そこからはアイルランド独立前の切羽詰まった移民の姿は見取れない。むしろ自由を謳歌し、自らの可能性を探しだそうと未知の世界に飛び込もうとする意気込みすら感じさせられる。この『カントリー・ガール』を含むシリーズ三部作の主人公バーバは、最終的にはロンドンへと行きつく。アイルランド西部からダブリン、そしてロンドンへと移動する姿は、まさに新たなタイプの「移民」であり、経済的繁栄を求めて移動したこの時期の人びとの行為を反映したものであろう。

同時期に活躍した小説家、ジョン・マクガハン (John McGahern, 1934-2006) もアイルランド国内を移動する若者を『青い夕闇』(*The Dark*, 1965) において登場させている。『カントリー・ガールズ』と同じように教養小説的な側面をもつ作品であるが、この主人公の男性は物語の最後でアイルランド西部の街を離れ、首都ダブリンへ旅発つ宣言を行う。ジョイスの『若い芸術家の肖像』(*A Portrait of the Artist as a Young Man*, 1916) の最終章において主人公のステイーヴン・デダラスは“silence, exile, cunning”ということばを吐き、祖国を後にするが、それを連想させる決別宣言であると言ってよい。ただ『青い夕闇』の主人公の場合、地方の保守的な社会から自由になりたいという願望に加え、経済的な自立という現実的な動機も見取れる。ちなみに『ブルックリン』の作者であるトビーンは、あるインタビューのなかでマクガハンとの交友について言及したうえで、彼から多くの影響を受けたと語っている²。

1980年代以降になると、移民描写と経済的側面がさらに強く結びつくことになる。日本にも滞在経験のあるコラム・マッキャン (Colum McCann, 1965-) は短編集『こちら側の光の中で』(*This Side of Brightness*, 1998) の表題作となった作品中で、経済的に繁栄する大都市と、仕事を求めて多くの者が去って若者がいない村を対比する形で、80年代と思われるアイルランドの不況を出稼ぎにいった子どもたちを待つ老夫婦の描写に投影させている。

ケルトの虎という好景気がきっかけで、アイルランドの国際的地位が向上した1990年代になると、移民を描く作家の態度に大きな変化がみられる。国の豊かさを象徴する一人当たりGDPの数値が英国を抜きさっただけでなく、ジェンダー・ギャップ指数など、社会に関わる数値の国際比較においてアイルランドが上位を占め、ある種の自信のようなものが国全体に漂い始めていた。そのような中で21世紀に活躍する作家たちは、単に物質的繁栄をもたらした社会を、明るい未来への希望でもって描き出しているのであろうか。それとも相変わらず、感傷的にアイルランドがもつ負のイメージを利用して創作しているのであろうか。

3 アイルランド史からみた移民の実態

本節では歴史的な視点からアイルランドの移民について確認を行ったうえで、アイルランド人作家が移民を描写する背景といったものを探りたい。移民を考える際にポイントとなるのは1845年から1849年まで続いたじゃがいも大飢饉であろう。この歴史的な大惨事によってアイルランド島に800万人いた住人が半減し、そのうちの210万人が移民となって祖国を後にしたという。19世紀に劇的な人口増加が続いていた西欧社会において、人口減を唯一経験したのがアイルランドであったと言われる。さらには、英国によって支配されていた過去と相まって、移民という現象はまさにアイルランド人の記憶からは消し去ることができないものとなっている。

ここでアイルランドにおける移民の概略について大まかにみていこう。1770年代から1830年代に大西洋を渡り北米へ移動したのは主にアルスター地方出身のプロテスタント(長老派)であった。移民をした者のなかには専門的知識を

有する者もあり、社会の下層に属する人びとばかりではなかった点も確認しておきたい。だが1830年代以降になるとカトリック信徒がその数を凌駕するに至る。さらに歴史関係の文献を調べると移民に関して興味深い事実が出てくることに気づく。現在世界で7千万人がアイルランドにルーツをもつと主張しており、そのうちの4千万人がアイルランド系米国人だという³。米国における移民が多様であったことはすでに多くの歴史学者が指摘していることであるが、一部の文学研究者など、ナショナリスティックな視点からアイルランド研究を行う者は、ある時代に限定された一つの出来事を、すべての時代にあてはめて理解しがちだ。その代表的な考え方としては、英国の圧政によって差別されたカトリック信徒が土地を奪われ、追放者となり、自由を求めて米国へ脱出したというものである。しかしながら、以下に示すように、この見解は適切でない。たとえば1914年以降、米国に代わって、英国がアイルランド人の主たる移民先となったことは歴史研究においてはほぼ定説となっているが(Daly 531; Kenny 411; Ferriter 330)、この事実は往々にして無視されてしまう傾向にある。英国への移民が多くなった背景としては、当地において英国の国籍をもつ者と同じ権利をアイルランド人が享受できたことに加え、米国における入国審査が厳格化されたという法律的な側面などが関係している。

さらには一般に流布している移民神話を打ち砕く事例として次のようなものが挙げられる。米国におけるアイルランド系移民に対して、ナショナリズム、カトリック信仰、そして民主党政治という3つの要素が伝統的にあてはられてきたとの指摘があるが、一方で4千万いるアイルランド系米国人の多くが自分はプロテスタントであると主張しているという(Daly 531)。貧しいカトリック系のアイルランド人が米国へ移民をするというステレオタイプは20世紀の前半にはすでに成立しえないのだ。別の視点で考えると、実態とはかけ離れたイメージがアイルランド系移民に付与され、それがステレオタイプとなって浸透してきたとも考えられる。そして一部の作家が、その矛盾を抱えながらも、移民という社会現象をうまく活用してきたとの見方も否定できない。

他方で移民を負のイメージをもつものとしてではなく、必要悪としてとらえる考え方もあった。たとえば、19世紀半ば以降のアイルランド経済を安定させ

るための社会の「安全弁」としてとらえるものである (Daly 549-50; Kenny 415; Ferriter 472)。言い換えると、雇用の数が限られていた時期に、移民をする者が存在することで、国内の雇用を守る機能を果たしていたとも考えられよう。さらには親が子どもに対して、将来の展望が望めない国内よりも、米国をはじめとする経済的に発展した地域に送り出した方が子どもの将来のためになると判断し、移民という選択肢を取らせた可能性もありえる。

ところで、「移民」の要因を経済的視点で考えた場合「プッシュ要因」(移民を送り出す側)と「プル要因」(移民を受け入れる側)の二つがあるとされる。プッシュ要因とは、人口増加、低い生活水準、雇用の不足などであるが、当時のアイルランドはまさにそれらの要素が合致する社会であった。そしてそのプッシュ要因をもたらしたものが、ナショナリズムの視点に立つと、英国による植民地支配であったとされる。自国の疲弊した経済状況を英国に責任転嫁するという典型的なナショナリスティックな思考が存在してきたとの指摘があるが (Garvin 195)、作家の移民を描く行為にもそれが適用され、ひいては反英国というプロバガンダが付与されてきたとの解釈も可能であろう。これまでアイルランドは、英国に支配された過去をもつことから、判官牘のような形で同情されることが多かった。そしてこの国の悲劇的な要素をもつ多くの事象は、じゃがいも大飢饉の時と同じように、英国に責任転嫁されてきた。アイルランド移民をその構図にあてはめた場合、英国の支配によって土地を奪われた農民が新天地を求めて、棺桶船に乗りながら、米国へ渡ったというとらえ方である。

事実これまでアイルランド文学研究において、植民地下における「支配」「被支配」という二項対立の構造にこだわる傾向があった点は否めない。北アイルランド紛争が活発化した1970年代以降、プロテスタント対カトリックの宗派対立が注目され「搾取されたカトリック信徒」というイメージが定着化する。さらには1980年代以降、小説家で現代アイルランド文学の泰斗シェイマス・ディーン (Seamus Deane, 1940-) やノーベル文学賞を受賞した詩人シェイマス・ヒーニー (Seamus Heaney, 1939-2013)、そして劇作家のブライアン・フリール (Brian Friel, 1929-2015) らによって組織された Field Day Group が、ナショナリスティックな創作活動を展開し「被支配者」としてのカトリック信徒

という構図を利用した発信がなされるに至った。移民はまさにそれを補完するものとしては恰好の舞台装置であったわけである。

だが 20 世紀後半になると、アイルランド情勢の変化や第三世界の経済発展に伴い、移民の持つ意味も異なってきた。1995 年以降、10 年ほど続いたケルティック・タイガーと呼ばれる好景気、北アイルランド紛争の終結（1998 年）、カトリック教会が禁じた離婚と中絶の緩和といった一連の出来事が、アイルランドの人びとの価値観を大きく変容させたのである。そして何よりもアイルランド社会がこれまでと異なり、東欧やアフリカ、東南アジアなどから多くの移民や難民を受け入れる側になり、「移民」に対する認識も激変したと言っても過言ではない。『ブルックリン』の主人公は、雇用の少ない農村から米国に移民した若き女性だが、その姿は等身大で描かれ、これまでと違って米国社会で差別される要素は全く含まれていない。そういったステレオタイプを排して描くトビーンの姿からアイルランド社会における価値観の変容を読み取ることも可能であろう。

4 トビーンの歴史への挑戦

20 世紀のアイルランド研究において、長年にわたって避けられてきたテーマの一つが、カトリック信徒の中での階級対立といった問題であった。英国に支配され、搾取されてきたとされるアイルランドにおいて、一枚岩であるはずのカトリック社会の根幹を揺るがすような事実には、ナショナリスト的な立場を取る知識人たちは目を背けていたのである。貧富の差はいつの世にも、また世界の至るところで存在するが、かつて英国系アイルランド人（Anglo-Irish）がピラミッドの上層を占め、下層をカトリック信徒が占めていた社会構造を打破したナショナリストたちにとって、新たに独立した社会の中に英国的な要素をもつ階級格差のような、カトリックを分断するものが存在することは許容できなかった。今なおアイルランド文学研究においてはこの階級という問題はタブー視されているようで、それを研究対象として扱えるのは歴史研究者や英国を拠点とするアイルランド文学研究者だけかもしれない。

トビーンもしばしば歴史修正主義の立場から書く作家としてみなされること

がある。事実彼はアイルランド史の空白を明らかにすべく『ブルックリン』においていくつかの挑戦を行っている。その一例が階級に関するものである。たとえばアイリーシュがアイルランドで一時雇いとして働いていた、ミス・ケリーの食料雑貨店での顧客対応に関する記述は、第2部において描かれるニューヨークのそれとは真逆のものと言えよう。

As each customer came into the shop on the days when she was being trained, Eilis noticed that Miss Kelly had a different tone. Sometimes she said nothing at all, merely clenched her jaw and stood behind the counter in a pose that suggested deep disapproval of the customer's presence in her shop and an impatience for the customer to go. For others she smiled drily and studied them with grim forbearance, taking the money as though offering an immense favour. And then there were customers whom she greeted warmly and by name; many of these had accounts with her and thus no cash changed hands, but amounts were noted in a ledger with inquiries about health and comments on the weathers and remarks on the quality of the ham or the rashers or the variety of the bread on display from the batch loaves to the duck loaves to the currant bread.

(*Brooklyn* 9-10)

上記引用は上客とそうではない客を区別する女主人の行動にアイリーシュが気づく場面である。顧客の資産状況によって店主が対応を変えるという行為は、この街に存在していた貧富の格差を浮き上がらせるものであり、英国からの独立によって小作人と地主という二項対立が消滅したはずの当時のアイルランドにおいて好ましいものではなかったはずだ。それに対して第2部が舞台となっている1950年代の米国は、言うまでもなく黄金期にあり、アイルランドとは対照的に経済的好況に恵まれ、世界から多くの移民が押し寄せていた。そして公民権運動が始まる前のニューヨークにおいては、有色人種への差別が存在していたことは周知の事実である。アイリーシュが働くバルトリッチ百貨店では、

アフリカ系アメリカ人に対し商品を販売する決断がくだされ、彼女もそういった対応を求められる。差別的な言動というより、顧客を平等に扱おうとする百貨店の対応は、自由の国アメリカを象徴するものであろう。この米国の平等な顧客対応とエニスコーシーでの不平等な顧客対応の違いは、両国の対称性を浮き上がらせているだけでなく、アイルランド研究における空白を埋める行為につながる作業であったと考えられないであろうか。

その他にも階級差をめぐる記述が『ブルックリン』には存在している。アイリーシュが一時帰国した際に急接近することになるジム・ファレルは、街の有力者を両親にもつ登場人物である。父親はパブの経営者であるが、アイルランドにおけるパブの経営者の社会的地位は、免許制での営業形態をとっていることもあり、昔から比較的高いことで知られる。ジムは単なる富裕層に属する人物というわけではなく、彼との結婚を勧める母親、それについて噂をする街の人びと、さらには二人の仲を引き裂こうとする食料雑貨店の女主人ミス・ケリーらの言動を考慮すれば、作品内で階級格差という点を露呈させる役割を担っているとの解釈も可能はずだ。トビーン自身、この作品において重要なテーマではないとしつつ、階級に関わる要素が多々あることを述べている⁴。

こういった歴史に正面から向き合おうとするコルム・トビーンは1955年に『ブルックリン』の舞台の一つとなっているアイルランド・ウェックスフォード州にある街エニスコーシーに生まれた。父方の祖父が初期IRAに属し、さらにはアイルランド独立のきっかけをもたらすことになったイースター蜂起(1916年)に参加した親族をもつことからわかるように、ナショナリスティックな環境で育ったことは間違いない。カトリック系の男子寄宿舎学校を経て、ジョイスなどを輩出したユニヴァーシティ・カレッジ・ダブリン(UCD)に進む。学位取得後にスペインに渡り、そこでの生活をもとに処女作『南』(*The South*, 1990)を出版した。彼自身祖国アイルランドを離れて、移民という立場に身をやつしていたわけである。海外在住経験に加え、ジャーナリストとして活躍した彼は、同性愛者であることも告白している。

彼の歴史観というべきものは、自身の移民経験や性的指向、そしてジャーナリストとして多くの弱者をみてきてことが関係しているはずだ。ナショナリス

ト的な立場を取る作家の中には英国に関わるものを恣意的に負のイメージを付与する形で描くことがあるが、トビーンの場合、そういった態度はみとれない。たとえば『ブルックリン』では英国をめぐる、以下にあるように極めて中立的かつ客観的な返答を登場人物にさせている。

Once they had ordered, Eilis looked around the café.

‘What are they like?’

‘Who?’

‘The English.’

‘They’re fair, they are decent,’ Jack said. ‘If you do your job, then they appreciate that. It’s all they care about, most of them. You get shouted at a bit on the street, but that’s just Saturday night. You pay not attention to it.’

(*Brooklyn* 34)

アイルランドを出たことのないアイリッシュは、初めて訪れた英国において、この地の人びとについて率直に尋ねる。妹からの質問を受けた兄は、差別的な言動をする者がいることを否定はしないが、公正であることや仕事をきちんとしたことへ評価をする風土がここにはあると、極めて当たり前の事実を語って聞かせる。20世紀前半の英国において建設現場などで働くアイルランド人への差別的言動があったことは事実であろうが、それを英国憎悪の方向にもっていかずに、冷静な筆致で当時の英国のありようを描くトビーンの姿勢は彼の歴史観を率直に物語っている。

トビーンがアイルランドの歴史を客観的かつ冷静にとらえていることは、次の引用からもわかる。夜学で会計を学ぶアイリッシュが授業についていくために参考書をニューヨークの書店で購入しようとした際、彼女は店主と次のようなやりとりを行う。

‘Joshua Rosenblum?’ the man asked. ‘Can you imagine a country that would want to kill him?’

Eilis stepped back but did not reply.

'Well, can you?'

'What do you mean?' she asked.

'The Germans killed everyone belonging to him, murdered every one of them, but we got him out, at least we did that, we got Joshua Rosenblum out.'

'You mean in the war?'

The man did not reply. He moved across the store and found a small footstool onto which he climbed to fetch a book. As he descended he turned towards her angrily.

'Can you imagine a country that would do that? It should be wiped off the face of the earth.'

He looked at her bitterly.

'In the war?' she asked again.

'In the Holocaust, in the *churban*.'

'But was it in the war?'

(*Brooklyn* 119-20)

ホロコーストに無知な主人公の描写は、ヨーロッパ史よりも英国との関係史に固執するアイルランドにおける歴史教育の偏狭性を露呈させている。ドイツが第2次世界大戦中にユダヤ人に行った蛮行については、その悲劇的な過去を繰り返さないという目的から、通常の学校教育の場で世界史として教えられる内容である。しかしながらアイルランドは第2次世界大戦下において中立政策を取り、ドイツと特異な関係を結んでいた。そのため、ナチスドイツのユダヤ人迫害についてこの時期の教育現場において扱っていない可能性が高い。加えてアイルランドでは、カトリック教会が公教育の運営を独占する期間が長く続き、教会の指針に従って歴史教育が行われてきた過去がある。たとえば、独立直後のアイルランド政界で活躍する人材を多く輩出したクリスチャン・ブラザーズ (Christian Brothers) 系の学校では、英国支配の理不尽さや非道さを訴える目

的から、独立を勝ち取るための手段としての暴力を肯定する内容の教育をしていたとの指摘がある。そしてカトリック信仰や英国支配への抵抗といったものに沿った教科書が採用され、それらに関わるものが中心的に教授されていたという (Coldrey 115)。本文の記述に基づけば、アイリーシュが中等教育を受けた時期は 1940 年代とみなすのが適切であろう。そうすると、上述したものと似たような環境下で、彼女はドイツ事情、すなわちユダヤ人迫害について知る機会はなかったと考えても不自然ではない。

ところで『ブルックリン』が創作された時期の 21 世紀のアイルランド社会に目を向けると、新たな事実も浮かび上がってくる。2000 年代の初めは、米国とは対照的にアイルランド経済が再び停滞期に陥った時期である。人びとの価値観も変容し、商業主義的な要素が大きな意味をもつようになっていた社会のなかで、自国よりも米国の方に、自由や平等、明るい未来というべきものが数多く存在するかのようこの作品でトビーンが描いている点は、彼の故国に対する想いを考えるうえで興味深い。彼へのインタビューで語っていることであるが、国外からの移民がアイルランドに多く押し寄せるようになった 2000 年代初頭、移民に対する風当たりが強くなってきた社会への警鐘という点も『ブルックリン』の執筆動機と関係しているようである。そして 2004 年に実施されたアイルランドの市民権をめぐる国民投票の結果をめぐって、彼は大きい失望を感じていたという (Carregal-Romero 132)。21 世紀の現在においてトビーンが移民について書く理由は、偏狭な愛国主義から距離を置き、この国で生まれたものはみなアイルランド人だと吐く『ユリシーズ』(*Ulysses*, 1922) の主人公レオポルド・ブルームの理想を体現したものと言ってよいだろう。

おわりに

アイルランド人作家はローカルな題材をグローバルなものへと変容させることで世界文学としての地位を築き始めたと好意的に批評したアイルランド人研究者がいるが (Hand 1-13)、一方でアイルランドの作家は時代に逆行し、いまだにカトリック教会や移民、植民地といったテーマにこだわり続けているとの批判もある⁵。トビーンはそのアイルランドを舞台に、移民というこれまでのア

アイルランド人作家が好んだテーマを選びつつ、歴史を歪曲せず、1950年代のアイルランド系移民の実態に即した形で創作を行っている。まさに前者の指摘に合致していると言えるが、アイルランド特有の題材をうまく活用しているところもある。たとえば、移民先で助け合うアイルランドコミュニティの中で、親身になって働くカトリック神父の姿があるが、これはアイルランド小説の中でこれまで否定的に描かれてきた聖職者像とは異なる。物語の最後において、アイリッシュの米国での過去を明らかにするとほめかされ、米国に戻ることを決意する行為も、この時期のアイルランド女性が閉鎖的な社会から汚名を着せられるのを逃れることを目的に移民していたという歴史的な事実と合致する。このようにイデオロギーやステレオタイプにとらわれず、歴史を忠実に描く行為はトビーンの特徴であろう。

さらには、もはやアイルランドから他国への移動することだけが移民ではなくなってきたという状況の中で、アイルランド人作家が創作を求められているという実情もある。昨今、20世紀以前にアイルランドへ移民してきた人びとの存在についても研究が進んでおり、移民先の米国から戻ってきたアイルランド人、すなわち“Returned Yank”という存在に焦点が当てられるようになった。こういった移民先の米国から戻ってきたアイルランド人の姿は1890年代の地方部にはなじみのある姿であったとの指摘があるが（Fitzpatrick 15）、アイリッシュも、ジョージ・ムアが描く「帰郷」の主人公も、まさにこの“Returned Yank”にあてはまる。21世紀の今、多用なアイデンティティが尊重される中で、移民は国家の損失というよりも、自らの殻を打ち破って広い世界の中でより多くのものを吸収できる行為ともみなされるようになった。トビーンをはじめとするアイルランド人作家が描く移民像は新たな局面を迎えているのである。

* 本研究は JPS 科研費 JP15K02371 の助成を受けている。

註

- ¹ 1822年の時点でアイルランド語のみを話す人口は約200万であったが、1861年になるとその数値は164,000人に満たないところまで激減したとの指摘がある (May 219)。
- ² Paul Morton, “An Interview with Colm Tóibín.” *Bookslut*. (http://www.bookslut.com/features/2009_06_014545.php 閲覧日 2020年1月10日)
- ³ 本節での移民に関する記述は Kevin Kenny の論考に多くを負っている。概説的なものであるが、あらゆる立場からの移民に関する文献が紹介されている。
- ⁴ Paul Morton, “An Interview with Colm Tóibín.” *Bookslut*. (http://www.bookslut.com/features/2009_06_014545.php 閲覧日 2020年1月10日)
- ⁵ Julian Gough, “The State of Irish Literature 2010.” blog. (<https://www.juliangough.com/journal/2010/2/10/the-state-of-irish-literature-2010.html?currentPage=2> 閲覧日 2019年12月30日)

参考文献

- Brown, Terence. *Ireland: A Social and Cultural History 1922-2002*. Harper Perennial, 2004.
- Carregal-Romero, José. “The Irish Female Migrant, Silence and Family Duty in Colm Tóibín's Brooklyn.” *Études irlandaises* [Online], 43-2, 2018.
- Coldrey, Barry. *Faith and Fatherland: The Cristian Brothers and the Development of Irish Nationalism 1838-1921*. Gill & Macmillan, 1988.
- Daly, Mary E. “Migration since 1914.” *The Cambridge History of Ireland, Vol. IV: 1880 to the Present*. Ed. by Thomas Bartlett. Cambridge Univ. Press, 2018.
- Farmer, Tony. *Ordinary Lives: The Generations of Irish Middle Class Experience 1907, 1932, 1963*. Gill & Macmillan, 1991.
- Ferriter, Diarmaid. *The Transformation of Ireland: 1900-2000*. Profile Books, 2004.
- Fitzpatrick, David. *The Americanisation of Ireland: Migration and Settlement, 1841-1925*. Cambridge Univ. Press, 2019.
- Garvin, Tom. *Preventing the Future: Why was Ireland So Poor for So Long?* Gill & Macmillan, 2004.
- Hand, Derek. *A History of the Irish Novel*. Cambridge Univ. Press, 2011.
- Hickman, Mary J. “Thinking about Ireland and the Irish diaspora.” *Are the Irish Different?* Ed. by Tom Inglis. Manchester Univ. Press, 2014.
- Joyce, James. *Dubliners*. Norton, 2006.
- *A Portrait of the Artist as a Young Man*. Norton, 2007.
- *Ulysses*. Bodley Head, 1993.
- Kenny, Kevin. “Irish Emigration in a Comparative Perspective.” *The Cambridge Social History of Modern Ireland*. Ed. by Eugenio F. Biagini. Cambridge Univ. Press, 2017.
- May, Trevor. *An Economic & Social History of Britain*. Second ed. Longman, 1996.
- McCann, Colum. *This Side of Brightness*. Phoenix House, 1998.

McGahern, John. *The Dark*. Faber & Faber, 2008.

Moore, George. *The Untilled Field*. 1914. Rev. ed. Macmillan, 1990.

Moynihan, Sinéad. *Ireland, Migration and Return Migration: The 'Returned Yank' in the Cultural Imagination, 1952 to the Present*. Liverpool Univ. Press, 2019.

O'Brien, Edna. *The Country Girls Trilogy and Epilogue*. Jonathan Cape, 1987.

Tóibín, Colm. *Brooklyn*. Penguin, 2010. (コルム・トビーン (著)、榎木 伸明 (訳) 『ブルックリン』白水社、2012年.)